

サロン九条 第 299 回例会

テーマ 「戦後民主主義のゆくえ ～ 一牧師の立場から」

話題提供： 日本キリスト教会 多田 滉(あきら)さん

\* 参加者 33 名

今回は、「岐阜・九条の会」代表呼びかけ人でもある日本キリスト教会の牧師 多田 滉さんから、聖書の記述を引きながら、敗戦体験から生まれた戦後民主主義の現状とその「ゆくえ」を日頃の思いとして話題提供いただきました。

多田さんは、まず、「戦後」民主主義の視点で、戦後短期間で使用されなくなった中学教科書「あたらしい憲法のはなし」に触れられ、戦後体験を決して軽く見てはいけないとして、聖書の記述を引き、“そこで、イエスは言われた。「剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる。」”との部分を紹介し、日本国憲法の制定が、敗戦下の国民に屈辱から立ち上がる足場を与えたことを強調され、さらに”あたらしい憲法“による教育の一節に見られる”思想信条の自由“は、今日の”共謀罪“とは対極のものであり、聖書においては、神の位置にあるものだけが、人の心を裁けるものと話されました。

また、岐阜刑務所での教誨師としての経験から、“権力を握ったものでは、人の心に入れるものではない”との理解があり、かつての“靖国”による“死を支配する論理”から、“新憲法”による”思想の自由”に依拠する“政教分離”により、“国家は宗教に立ち入らず、宗教者はそれを強要できない”とされ、このルールによって我が国の近代化が図られたものとして、“人の心をもてあそぶ危険性の理解”を訴えられました。

さらに、聖書を参考に、“教会（宗教）は、どのような意味でも権力化しない”ことや“国家が宗教を抱き込む時は、政治本来の力の衰え、あるいは放棄を意味する”ことを強調されました。

続いて、戦後民主主義の「ゆくえ」について話された多田さんは、「戦後民主主義」の源泉は、フランス革命ではなく、イギリスの清教徒（ピューリタン）革命に見られるイギリスの信仰心であると考えられ、敗戦直後の日本の問題を“本質的に神学的なもの”との指摘があったことに触れ、“唯一絶対神の下で、全てが相対化される”とされました。

加えて、教会における“寛容の精神”“他者への敬意”“(真理探究の)会議の精神”を示し、“政治権力の限定に向けての信教領域の確保”を述べられるとともに、「憲法九条の書き換えは、確実に戦後民主主義の行方不明を結果する」と警告されました。

最後は、民主主義的人間と自然の話題として、聖書は“神が完全な自然を作ったが、人間によって傷み、神の子たちの現れるのを切に望んでいる”ことを伝えており、日本人の優越性として、盆栽・和食・里山など、手を加えることによる自然化が見られるが、その一方では原発の平和利用の先に戦争が見えるとも語られました。

その後の意見交換では、真理・神・科学と宗教・会議の精神などをキーワードに活発な発言がなされ、「真理に立った時、皆は平等である」、「対話とは他者に聞くことが前提であり、他者への敬意は、少数の中にも真理があること」、「日常的な愛情による悲しみの共有から平和の共有へ」、「資本主義による科学の勝手な利用に対して倫理が限界を示している」、「(神的)超越を知った上で、今ある世界をありのままに受け入れて、今何をすべきかを考えたい」などの意見がありました。

今回の意見交換では、宗教を受け入れる立場とそうでない立場での意見がありましたが、神でないものが、神的に権力を振るっている今こそ、私たちは“他者への敬意”“(真理を追う)会議の精神”を実践してその威力を発揮させ、圧倒的な民を結び付けながら、自らの優れた指針をもって、神的なものに対し、“政教分離と戦後民主主義の復元”を求めていく必要があります。